

うして『悲慘』から脱出する『光明』を見出すのか』を探り当てながらじむじかじたに「あせり」を感じていた。このような時期に多喜一はチエトホフや「ストエトフスキイ作品を見る「明るさ」に学んだ。さらに時をへて1930年10月、豊多摩刑務所から鹿地宣宛ての手紙では、「君のうちにはチエトホフが欠けている」と指摘しており、チエトホフへの偏倒ぶりがうかがえる。ゴーリキイに関しては、特に戯曲『どん底』や短編『チエルカシン』に深く共鳴していくなどして、それが多喜一の「暮物戯曲『女囚徒』や『蟹工船』」にも影響を与えていると思われる。「いかに苛酷な現実にあっても、現実に打ち負かされず、たくましく

生きていく人間の追求を進めつつ、やがて生活を創造し変革を進める人間集団との結合のうちに、人間への信頼、その可能性への無限の信頼を貰いだしてゆく。ここに松本氏はゴーリキイから多喜一が受け取った「魂のメソセージ」を見ている。

(大木昭男)

て來ていた。かくて私はこの人々との交わりを中心にして、一九六四年に『樺太よ遠く孤独な』(西田書店)を上梓した。翌年ゴルバチョフの登場があり、八九年になつてようやく南サハリンの全域が往来可能となつた。4人と4人に別れて暮らしていく混血者たちも、存命者たちは再会を果たし、私もまた来日者として膝を交えて語り合つた。そのことは『歓楽の沈黙』(一九九五年、晩聲社)に記したが、その後にフェドールチュークによるこの小冊子を知ることとなつた。そこでは私の知る一家が異なつた視点から書かれていた。たゞ日本に住む人々は除外されおり、混血者の複雑な問題は回避されていた。いずれにせよ私は主題が重なりあつてゐるので、本書の名は既に〇三四年刊の『日露領土紛争の根源』(草思社)のなかでも小見出しに掲げ、それについてコメントした。その後、札幌在住の本書の訳者と電話で話す機会があり、拙著を読んだりする人であることが分かつた。

一方の当事者であるブーチンに体現される連邦側にとって、今最も嫌な事はチエチエンの現実を世に知らしめられるこ

が知らず知りえない側面は原著者を裨益することである。たゞでは残してた4人のうちの2人は、留を余儀なくされたのである。即効勧力となる年齢の者は、韓国・朝鮮人同様サハリンに留め置かれたのであつた。原著者がそれに触れていないことを、訳者は気付いていないのだ。私の知る混血者たちは本書のインタビューで本音を語っていない。

(長瀬隆)

チエチエン

やめられない戦争
アンナ・ボリコフ
スカヤ著／三浦みどり訳／日本放送出版協会刊／2500円

人であるロシア人について書かれていることがうたわれている。サハリンでは、ロシアの他の地域とは異なり、カラフトとは日本時代を指すと知っているロシア人たちがねり、それでこのロシア語の表題が可能となつた。私は樺太で、この本の冒頭に出てくるエフィーモフの一族を知つて育つた。そのなかには日本の女と結婚した者がおり、8人の混血の息子と娘が生まれ、そのうちの一人がわが家にお手伝いをして

この本の原題は正確には「第2次チエチエン(戰争)」。そしてチエチエンヒロシアの歴史的な因縁から始まりのスターリン時代の強制的な民族大移住、94—96年のロシアの第一次軍事介入、99年からの第二次と、その経過を細かくだらり政治的経済的要因を分析している。一方の当事者であるブーチンに体現される連邦側にとって、今最も嫌な事はチエチエンの現実を世に知らしめられるこ

樺太に生きた
ロシア人
S・フェドールチューク著／板橋政樹訳／ナウカ社刊／2500円

樺太はカラフトと読む。それはすでに死語になりかけてゐる。そのような国で、原題では『カラフトのロシア人』である、サハリンのロシア人熱筆の本が翻訳刊行されたり。帶にすると、日本の敗戦時樺太に住んでいた40万人のなかの200